

只見町の古民家調査の成果が国際科学雑誌で発表！

2015年から2021年にかけて、信州大学教育学部の井田秀行教授らが只見町の古民家に関する調査研究を進めておりました。この度、その調査研究の成果をまとめた論文が、国際科学雑誌「Ecological Research 誌」で発表されました。

<https://doi.org/10.1111/1440-1703.12408>

オープンアクセスとなっており、どなたでも論文のPDFをダウンロードいただけます。

(以下、井田秀行教授 提供文)

論文のタイトル：

「Optimizing species selection for the structural timbers of traditional farmhouses in a snowy rural area of northeastern Japan (東北地方の豪雪農村地域における古民家の構造材の最適な樹種選択)」

著者：井田秀行・佐藤拓真・陸川雄太・阿部伶奈・梅干野成央・土本俊和

論文要旨：

地域の木材を利用して建てられた伝統民家には、森林資源の利用に関する情報が含まれている。本研究では、伝統農家建築（古民家）に木材がどのように利用されていたかを明らかにするため、豪雪地帯である只見町において、1845年から1940年頃までに建てられた11棟の古民家の部材の木材種を同定し、また、住民70世帯から聞き取りを行った。調査した2004部材（1棟あたり99-308部材）、合計材積171.2立方メートル（1828部材）からは、計14種が特定された。このうち、スギとキタゴヨウがそれぞれ材積で44%、39%を占めた。ブナは3番目に多く（7%）、屋根を支える扱首（サス）、梁、桁に用いられていた。聞き取り調査の結果、木材は距離1km以内の私有林や共有林から調達され、地元の職人によって伐採、搬出、運搬されていた。たびたび生じる雪崩によって特徴づけられる当該地域特有の複雑な植生を考慮すると、地域の高木やその林中で、最も入手しやすい樹種はスギであり（ただし自生か植栽由来かは不明）、次に、集落周辺の山の尾根に自生するキタゴヨウであったと思われる。一方、十分な量の木材を供給できるブナ林は限られていたと考えられる。以上から、只見町では雪深い厳しい環境にもかかわらず、歴史的に地元で入手可能な高木が材木として選択されていたと結論づけられる。